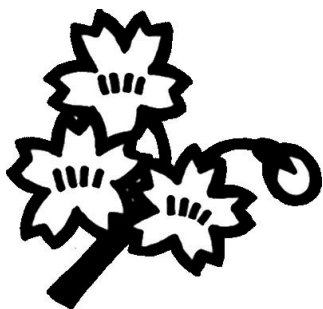


ほんばこ



No. 52

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 52 号 (通巻第 68 号)

2017 年 3 月 21 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教 育 図 書 館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- ・『神田古書センターとカレーの街神保町』 高山 肇 2~3 p
- ・ 図書紹介『崩壊するアメリカの公教育 日本への警告』
岩波書店、2016年8月発行、鈴木大裕(著)
朝野 雅子 4~5 p
- ・ 最近の受入図書 (2016年12月~2017年3月受入) 3 p、6~7 p
- ・ 教育図書館のご案内 8 p

焼

高山 肇

あまり原稿を書いた事のない自分ですが、締め切りに追われてペンを持ち始めました。奇しくも今日は2月11日、39年前の昭和53年のこの日に「神田古書センター」はオープンしました。昨年「ウォーナーの謎のリスト」という映画が神保町シアターで上映されましたが、その中で語られているように神保町の古書街は太平洋戦争の空襲から意図的に免れ、古書店街は現在に続いています。

私が4代目の店主をさせて頂いている高山本店も関東大震災では焼けたものの昭和50年当時、築50年を越す5軒長屋でした。折しも都営新宿線の地下鉄の工事が我々の長屋の軒下まで迫ってきて震災後の急ごしらえの木造の店は悲鳴をあげていました。5軒長屋の古書店がいっしょに共同ビルを建てようという話が自然と出てきました。

結果的には明治期から隣同士だった北澤書店と高山本店がいっしょに共同ビルを建てる事になりました。私は当時27か28才だと思いますが、古書店の4代目を継がなければという思いと、神保町を盛り上げるにはもっと多く有力な古書店に神保町の出店

してもらいたい、そんな思いで「神田古書センター」を建設する事になりました。当時神保町では店舗ばかり入る賃貸ビルが珍しい時代でしたが、建物の前面にシースルーのエレベーターを持ってきて、2階から上の店へのお客様の誘導をはかり、又、本が多量に積まれる事を念頭に置き、建物の耐荷量を当時考えられている2倍の数値にして設計をしました。いくつかの新聞にも載せて頂き、なんとかいいスタートを切ることができました。

現在まで続いている店舗の中で私が個人的に思い入れがあるお店があります。

話は更に10年余りさかのぼります。私の弟が昭和40年から英国に留学していて私の母親が長男である私にもロンドンに行かせて勉強させようという事になり結婚間もない昭和43年、夫婦揃ってテニスで有名なロンドンのウィンブルドンに1年半滞在しました。ロンドンにいる間、大して英語は身につけなかったものの、インド人が経営しているカレーのお店でロンドンカレーを食べまくってました。そして料理の本を研究して自分のアパートでロンドンカレーを再現しては英語の学校の友達を呼んで食べさせていました。

東京に帰ってからもカレーパーティーを続け、次第に神保町にロンドンカレーのお店を開きたいと思い始めたのがちょうど古書センターの構想が持ち上がった頃でした。

人伝いに自分のイメージするカレー屋さんを訪ね歩き巡り会ったのが当時高島平でカレーショップ「インディラ」を運営していた村田さん兄弟でした。

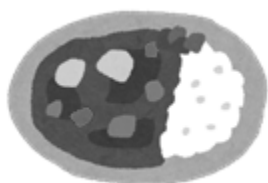
私の熱い説得と村田社長の大決断で昭和53年2月11日古書センターオープンと同時に「欧風カレーボンディ」が誕生しました。当時神保町には私の子供の頃からあったカレーのお店も何軒かあり、カレーが受け入れられる土壌もありましたが、開店して約10か月、昭和54年にはマスコミに取り上げてもらい大ブレイク、更にはその何年か後には同じ地域に「マンダラ」が開店、今に続く「カレーの街神保町」の先駆けになりました。

街は変わり続けていきます。

私の店も神保町に出店して130年余り、神保町の古書店全体に対する地域の皆様の理解と応援を頂いていると「古本まつり」がある度に強く感じています。本当にありがたく思っています。

本離れ、活字離れといわれていますが、神保町には日本を代表する出版社、書店、そして数多くの編集プロダクションがあります。これからも皆さんとしっかりと連携して引き続き世界の活字文化、書籍文化の中心に神保町があり続けられる為、努力して参ります。

2017年2月



神田古書店連盟顧問
一般財団法人日本教育会館 理事

最近の受入図書（1） (2016年12月～2017年3月受入)

【日教組刊行物】

『あなたの職場では、ルールが守られていますか？』日本教職員組合編 日本教職員組合 2016.11

『憲法・平和・教育を守る母と女性教職員の会 全国集会報告集』2016年 日本教職員組合編 (株)アドバンテージサーバー 2016.12

【教育研究全国集会報告書】

『日教組教育研究全国集会報告書 第66次』第1分科会～第24分科会 日本教職員組合編 日本教職員組合 2017.2

【教育総研刊行物】

『季刊フォーラム教育と文化』85号 (2016 Autumn) 教育文化総合研究所編 (株)アドバンテージサーバー 2016.10

『季刊フォーラム教育と文化』86号 (2017 Winter) 教育文化総合研究所編 (株)アドバンテージサーバー 2017.1

【文部科学省刊行物】

『学校基本調査報告書』平成28年度 文部科学省 著 日経印刷 2017.1

『地方教育費調査報告書』平成27年度 文部科学省編 株式会社ブルーホップ 2017.1

【平和資料】

『魂鎮への道』飯田進著 岩波書店 2009.6

『東京大空襲・朝鮮人罹災の記録 増補版』東京大空襲・朝鮮人罹災を記録する会編 2006.3

『抵抗をどう教えるか』歴史教育者協議会編 翻訳協力 カトレ・ツヤ子 教育史料出版会 1993.7

《 図 書 紹 介 》



『崩壊するアメリカの公教育 日本への警告』 岩波書店、2016年8月発行、鈴木大裕（著）

今から30年近く前になる。自分が教育学部の学生だった頃、大学の講義の中で教授が「今の日本の学校で起こっていることは、10年前から20年前のアメリカで起こっていることと似ていることが多い。」といった趣旨の話をしていてのを覚えている。講義の中身は忘れたのだが、そのフレーズだけがやけに印象に残っていた。なぜなら、「じゃあ、日本はアメリカの失敗例を見て、失敗しないようにやればいいんじゃないですか？」と当時講義を聞いていた友人が質問したのを覚えていたからだ。教授がなんと答えたかは覚えていないのだが、「崩壊するアメリカの公教育 日本への警告」を読み終えて、ふとそれを思い出した。

この本の著者である鈴木大裕さんは、高校時代にアメリカの高校に留学し、そのままアメリカのコーネル大学教育学部へ進学。大学卒業後は、スタンフォード大学教育大学院へ進み、修了後は日本に帰国し千葉市の公立中学校の英語教諭として2002年から7年間勤務している。さらに、再度2008年にフルブライト奨学生として渡米し、コロンビア大学大学院博士課程に入学。講師として勤めながら、現在もアメリカ在住で研究者として社会問題に積極的にとりくんでいるという経歴の持ち主である。

日本での教員生活7年目の2008年、著者は停滞しているかのように見えた日本の教育の進むべき道を、アメリカに求めて渡米を決意する。当時アメリカでは、チャータースクール等の学校選択制や教員の能力給制度などを取り入れるなど大胆な「市場型教育改革」を行っていた。入学した大学院では、「市場型教育改革」について積極的に学んだ。しかし、学んでいくうちに見えてきたものは、アメリカの教育の闇の部分、日本ではほとんど知らされていない「市場型教育改革」の負の側面だった。

「第1章 教育を市場化した新自由主義改革」から「第7章 アカウンタビリティという新自由主義的な『責任』の形」では、すさまじいアメリカの教育現場の姿が浮き彫りにされている。

1983年のレーガン政権下、アメリカ教育相長官の諮問機関が、報告書『危機に立つ国家（A Nation at Risk）』を発表した。これは、アメリカの学生の学力低下と教育の質の低さを劇的に描写し、世界市場における国家失墜の危機を訴えるものであった。ここから、アメリカの新自由主義にもとづいた教育改革「学校選択制」などが始まる。これは、競争原理を軸に各学校の競争力を上げようとする試みであった。この制度の根拠には、各学校、各家庭に平等な競争が保障されるという想定があったが、実際には、地域や家庭間のさまざまな違いが競争に反映し、教育格差の再生産が起こった。そして、それは学校の序列化と教育の機会均等の崩壊へとつながっていった。また、2001年のジョージ・W・ブッシュ政権の「落ちこぼれ防止法」の制定によって、全米共通学力基準（全米中の学校で行われる統一の学力テスト）の学力基準に到達しない学校への制裁が義務付けられた。これによって学校の序列化に拍車がかかっていった。

さらに、オバマ政権では2008年のリーマン・ショック後、「頂点への競争資金」と名付けた連邦政府助成金の獲得競争を展開した。財政難に苦しむ各州はこれに参加せざるを得なかった。

これによって、全米の教育行政を一斉操作することに成功したのである。



この競争に参加するためには多くの条件があり、主なものは次の5つである。

- ① 前述した全米共通学力基準の適用
- ② 生徒のテストを蓄積し、長期的分析を可能にするデータシステムの作成
- ③ 成績の低迷する学校に対する大胆な再建手法（底辺校の廃校や教員の総入れ替えなど）
- ④ 学校、校長、教員の評価と生き残りを、生徒のテストの点数と結びつける制度の導入
- ⑤ 州が定める公設民営のチャータースクールの設置数の上限撤廃

これらの条件は、学力テストの点数のみが「学力」として認識され、このテストの点数によって学校や教員が評価されるということを意味している。ここには、子どもたちの学ぶ過程などは表れてこない。点数という結果のみである。また、「学力」の低い底辺校は廃校となるため、通っていた子どもたちは行く場所がなくなっていった。

こうした動きの中、廃校になった場所には、教員免許をもたない者を採用してもよいとされているチャータースクールが設立されていく。公設民営のチャータースクールには、NPOなどから派遣された教員免許をもたない安く雇える若い「教員」を配置することができるとする法律があるため、免許をもった教員を雇わなくても学校で授業ができるのである。さらに、これが進んだ現在では、教員免許のない無免許のインストラクターが最大130人の生徒をモニターしながらパソコンによる「個別指導」を行う「ロケットシップ・エデュケーション」というチャータースクールが急成長中している。IT産業や様々な教育産業が、このチャータースクールを推し進め、全国にフランチャイズ展開しようとしている。

日本の公立学校で働く者としては、愕然とする思いである。あくまでこれはアメリカの公立学校で起こっていることだが、似たような現象が私たちの足下でも起きていないだろうかと考えさせられた。本書の中にも出てきている。

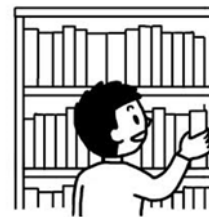
「このような教えと学びの『数値化と抽象化』が小さな政府による国中隔々に行き渡る遠隔操作を可能にするのだ。その点で安倍政権が全国学力・学習状況調査を抽出式から悉皆式に戻したことは非常に大きな意味があり、政府による統制を強化しようとする意図が汲み取れる。」

暗雲たる思いで本を読み続けていたのだが、第8章から第10章では、公教育を取り戻すために立ち上がったアメリカの人々の活動が記されていた。これは一筋の希望にも見える。

アメリカの新自由主義にもとづいた公教育がすべて失敗とは言えないのかもしれない。しかし、少なくともアメリカの全ての子どもたちが、平等に学んでいるようには思えない。私たちは、すべての子どもたちが教育の機会を与えられるように、「公教育とは何か」をしっかりと考えなければいけないのではないだろうか。

日本の教育が、いつか行く道にならぬよう「日本は、アメリカの失敗例に学んで失敗しないようにやればいいのかではないですか？」と本書は警告を発してくれている。

（日本教職員組合 教育文化部長 朝野雅子）



最近の受入図書（２）

(2016年12月～2017年3月受入)

【社会・教育・軍事関係】

『批判的教育学事典』マイケル・W・アップル、
ウェイン・アウ、ルイ・アルマンド・ガンディ
ン編 長尾彰夫、澤田稔監修 明石書店
2017.1

『教育小六法』2017（平成29年版）教育小六法編
集委員会編 学陽書房 2017.2

『部落問題と近現代日本 松本治一郎の生涯』イ
アン・ニアリー著 森山浩一、福岡県人権研究
所プロジェクト監訳、平野裕二訳 明石書店
2016.11

『東日本大震災から5年 未来への軌跡』日本労
働組合総連合会・連帯活動局編 日本労働組合
総連合会 2016.12

『教育改革はアメリカの失敗を追いかける』山本
由美著 花伝社 2015.7

『取り残される日本の教育』尾木直樹著 講談社
2017.1

『話すための英語力』鳥飼玖美子著 講談社
2017.2

『世界を変える教室』ウェンディ・コップ著 松
本裕訳 英治出版 2012.4

『アメリカの大学の裏側』アキ・ロバーツ、竹内
洋著 朝日新聞出版 2017.1

『「家庭団欒」の教育学』鈴木昌世編著 福村出
版 2016.6

『すぐ実践できる情報スキル50』塩谷京子編著
ミネルヴァ書房 2016.4

『「子育て先進国」ニュージーランドの保育』七
木田敦、ジュディス・ダンカン編著 福村出版
2015.4

『情報学習支援ツール』木村明憲著 黒紙晴夫・
堀田龍也監修 さくら社 2016.12

『学校づくりと学校経営』小島弘道・勝野正章・
平井貴美代著 学文社 2016.9

『いつか、すべての子供たちに』ウェンディ・
コップ著 東方雅美訳 渡邊奈々解説 英治出
版 2009.4

『デジタルで教育は変わるか』赤堀侃司著 ジャ
ムハウス 2016.7

『協調学習とは』三宅なほみ、東京大学CORE
F、河合塾編著 北大路書房 2016.7

『最高の子育てベスト55』トレーシー・カチロー
著、鹿田昌美訳 ダイヤモンド社 2016.11

『新しい学力』齋藤孝著 岩波書店 2016.11

『スウェーデンの小学校社会科の教科書を読む』
ヨーラン・スバネリッド著 鈴木賢志編訳 新
評論 2016.12

『アクティブラーニングを支えるカウンセリング
24の基本スキル』小林昭文著 ほんの森出版
2016.7

『無理なくできる学校のICT活用』長谷川元洋
監修・著、松阪市立三雲中学校編著 学事出版
2016.3

『アクティブ・ラーニングと環境教育』日本環境
教育学会編 小学館 2016.6

『奨学金が日本を滅ぼす』大内裕和著 朝日新聞
出版 2017.2

『「グローバル人材育成」の英語教育を問う』齋
藤兆史、鳥飼玖美子、大津由紀雄ほか著 ひつ
じ書房 2016.1

『監獄のなかの子どもたち』倉持史朗著 六花出
版 2016.12

『パブリック・スクール』新井潤美著 岩波書店
2016.11

『ブラック化する学校』前屋毅著 青春出版社
2017.2

『Q&Aスクール・コンプライアンス 111選』
菱村幸彦著 ぎょうせい 2017.3

『情報社会の〈哲学〉』大黒岳彦著 勁草書房
2016.8

『10代からの情報キャッチボール入門』下村健一
著 岩波書店 2016.9

『セカンドハンドの時代』スヴェトラナ・アレクシェーヴィチ著 松本妙子訳 岩波書店 2016.11

『日本人として知っておきたい「世界激変」の行方』中西輝政著 PHP研究所 2017.1

『貧困の現場から社会を変える』稲葉剛著 堀之内出版 2016.1

『学校における自殺予防教育のすすめ方』窪田由紀編、窪田由紀、シャルマ直美、長崎明子、田口寛子著 遠見書房 2016.2

『続・下流老人』藤田孝典著 朝日新聞出版 2016.12

『子育て支援が日本を救う』柴田悠著 勁草書房 2016.6

『「正しい政策」がないならどうすべきか』ジョナサン・ウルフ著 大澤津・原田健二郎朗訳 勁草書房 2016.1

『トランプは世界をどう変えるか?』エマニュエル・トッド 佐藤優著 朝日新聞出版 2016.12

『キャスターという仕事』国谷裕子著 岩波書店 2017.1

『アクティブ・ラーニングの評価がわかる!』西川純著 学陽書房 2017.1

『人工知能と経済の未来』井上智洋著 文藝春秋 2016.11

『ルポ児童相談所』慎泰俊著 筑摩書房 2017.1

『岩波講座 教育 変革への展望』6 佐藤学／編集委員、秋田喜代美／編集委員、志水宏吉／編集委員、小玉重夫／編集委員、北村友人／編集委員 岩波書店 2016.11

『三流の維新一流の江戸』原田伊織著 ダイアモンド社 2016.12

『岡潔 数学を志す人に』岡潔著 平凡社 2015.12

『日本のインテリジェンス工作』山本武利著 新曜社 2016.11

『ルポ トランプ王国』金成隆一著 岩波書店 2017.2

【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『土の記』上・下 高村薫著 新潮社 2016.11

『しんせかい』山下澄人 新潮社 2016.1

『夜行』森見登美彦著 小学館 2016.1

『さよならの力 大人の流儀7』伊集院静著 講談社 2017.2

『罪の声』塩田武士著 講談社 2016.12

『カブールの園』宮内悠介著 文藝春秋 2017.1

『アメリカーナ』チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ著 くぼたのぞみ訳 河出書房新社 2016.1

『騎士団長殺し』第1部 踊れるアイデア編・第2部 遷ろうメタファー編 村上春樹著 新潮社 2017.2

『蜜蜂と遠雷』恩田陸著 幻冬舎 2016.9

『わたくしたちの旅のかたち』兼高かおる、曾野綾子著 株式会社 秀和システム 2017.2

『マンガ まさかの福澤諭吉』上下 雁屋哲・作 シュガー佐藤・画 遊幻舎 2016.12

『獅子』池波正太郎著 新潮社 2016.11

編集後記

教育費がかかるために、子供は一人か二人。教員は多忙を極め、子供たちは遊び場も少なく、ひきこもりやいじめの問題を抱える日本。さらにはICT化による設備費用や教員の多忙の問題。日本だけでなく、世界全体に格差が広がり、公教育が問われています。奨学金という名の教育ローンについても、かつては育英会から借りて教員になった方も多いはず。教育とは、人を育てるために何が必要で何が大切か。日本が国際社会でしっかりと主張しながら生きていくためにも、真の教育に時間とお金をかけてほしいと思うこの頃です。

高山様には、神保町での古書店の歴史やトカレー店の興味深いお話しを、朝野様には、アメリカの公教育についてわかりやすい図書紹介をいただき、感謝申し上げます。(川内)

教育図書館案内

- * 開館時間：10：00 ～ 16：30
- * 休館日：土曜・日曜日、国民の祝日、夏期及び年末年始の休館日、臨時休館日
- * 蔵書の貸出
貸出冊数：5冊／貸出期間：3週間
館外貸出には、利用者登録が必要です。
(ご自宅住所が確認できる身分証明書をお持ち下さい。受付で貸出カードを発行します。)
- * 返却方法
開館中 カウンター受付へ
閉館時 「ブック・ポスト」をご利用下さい。
設置場所：5F図書館入口前
- * レファレンス・サービス
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています。
- * コピーサービス
(白黒1枚10円／カラー30円)

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
反核（原発関連を含む）・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー：
日教組教育新聞・雑誌（「教育評論」「月刊JTU」など）、教育政策、教育課程、教科書問題、各部の図書・資料など
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など このほか旧国民教育研究所時代のあらゆる刊行物も含む
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物：
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導

要領、指導書など

- 防災・減災コーナー：地震関係や防災関連図書を集めました。
- 人権コーナー：人権問題関係の図書
- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書

蔵書の特徴

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 2016年4月現在約66,000冊になります。
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面から検索できます。

(<https://ilisod001.apsel.jp/kyoikutoshokan.lib/wop/pc/pages/TopPage.jsp>)

交通案内

- 神保町駅 A1出口より徒歩3分
- 九段下駅 6番出口より徒歩7分
- 竹橋駅 1b出口より徒歩5分
- 水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

